

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

淫舞の
巫女姉妹
鬼に見初められし者

小説 空蝉

挿絵 ヤツシマテツヤ

第一章 最強の巫女姉妹

第二章 美姉妹は巨悪に穢され

第三章 姉妹相克

第四章 姉妹巫女相姦

終章 巨根の前に巫女は屈す 姉妹の告白

006

047

092

138

219

登場人物紹介

Characters



しんぐうまき
新宮真希

退魔巫女の一族に生まれた姉妹の姉。気が強く、険しい表情でいることが多い。栗毛のポニーテールで、巨乳。実は妹に密かなコンプレックスを持っている。

しんぐうさつき
新宮沙津樹

真希の妹。幼い頃から常に姉と行動する。黒髪のロングストレートで、大人しく清楚な性格。凛々しい姉に憧れを抱いている。

おに
鬼

妖怪たちのボス。人よりも以前から日本に住み、人間を駆逐する計画を立てている。強大な力を持つ。

ばとうようかい
馬頭妖怪

幹部の一人。頭は弱いのが、本能による性欲と闘争心、腕力はとても強い。

ぬらりひょん

幹部の一人。陰湿で陰険な参謀。身体から生やした触手を使い、女をいたぶる。

(お、大きい……！ な、なんなの、あれが男の……モノ？)

「グヒヒヒイ、見えるかあ、俺様のマラがあ。ちんぽがピンッピンに勃ってるのがよオ」
初めて目にしたソレは、酷くねじくれて凶悪な形状に映った。

少女の腕ほどもありそうな幹回り。優に一メートルはありそうな長大な竿は、立ったまま拘束された真希の胸元まで朶々と届いていた。雄々しくそそり立つ肉棒の突端は一段と大きく膨れ上がり、まるで凝り固まった瘤のようにも思える。ぶくりと幹に浮いた青筋が、牝の視線を感じ取ってかビクビクと歓喜に打ち震えた。

「ひっ……!？」

じやりっ……緊張で下肢にこもった力で草履が土を擦る。男のモノが脈動するとは聞いていた。だが実際に間近で目にしてみれば、原始的な生殖本能による痙攣は酷く奇異なものに映る。真希は勝手に震えだした脚を見つめ、心中の戦慄わななきはつきりと認識した。

「コイツでお前の生意気な乳をしつぱり、可愛がってやるぜ」

ずい、と押し出された肉棒はビクビクと小刻みな脈動を繰り返していた。恐る恐る見つめる視線の先で、くびれた尖端の割れ目からは何か得体の知れぬ汁を少量漏らしている。

「クク、ほおれ」

「ひあ!? なっ、いやあっ！」

見るほどに吐き気を催してくるグロテスクな肉の凶器が、よだれで濡れた乳肌へとやおら押しつけられた。肉越しに伝わる熱の高さ、舌とまるで違う硬度に再度戦慄する。逃れ

ようと振り回したはずの腕は、土蜘蛛糸による拘束でびくりとも動いてくれなかった。

「うくう、離せッ！ 薄汚いモノを近づけるなあッ……ひあああ!？」

押しつけられた勃起でどのように乳を弄ばれるのか。見当もつかぬ行為に畏怖し、遮二無二振り乱される黒髪の間隙を縫って、牡は腰を押し出した。

——ずぬ、ずにゆにゆうッ……!」

「おお、あつたけエ……ケヒヒ、こりやア最高の乳触りだア……!」

「うう……くう、ひ、イヤあ……!」

左右の乳肉が詰まった窮屈な谷間へと押し込まれた巨大肉勃起に、意図せずともしつとりとした肌が吸いついていつてしまう。たすきで寄せ上げられた乳肉をムリムリと押し退けて進む牡肉が、谷間からひよっこりと顔を出す。造形美に溢れた戦巫女の双乳の間から、醜悪極まりない赤黒の肉棒が覗く奇異な光景。

さらに鼻先で漂う、生臭い刺激臭が真希の意識を儚く移ろわせた。目尻に自然と皺が寄る。牡の圧倒的な存在感で本能的に腰が震え、心拍はさらに高まっていく。

「へへ、いつやってもこの眺めは牝を墮としたってえ、イイ気分させやがる!」

汗を滲ませ滑りを増した乳肉表面を蹂躪しながら、牡の存在を牝に刻むように勃起の突端がブルリと震えた。痺れと熱。牡の感じる感覚がそのまま伝わってきたような二つの感覚に、戦巫女のたわわな乳房は晒され、責められ続けていた。

「そおれ、ズーリズリとオ!」

——むにゆう、むににイイツ……。

「うあ！ はあううつ……人の乳だと思つて、好き放題……くあん！ ちくしよお……」

谷間を上下に動く勃起の鋭く尖った形状に、パンパンに詰まった乳肉が柔軟に歪んで対応していく。脱げかけたブラジャーはあえて取り外されることなく巫女の羞恥を煽っている。左右から蹄で押さえつけられ、牡の快感を増幅させるためだけに中央に寄せ上げられた二つの膨らみは一層巨大に膨張し、まるで鏡餅のようにも見えた。

根元から肉鞭を締め上げるように寄せ上げられるだけでも、ズクンズクンと心臓に直接響く疼きが止まらない。まして谷間で存在感を発揮する牡肉の熱が、悔しさに歯噛みする真希の快楽神経を蕩かせていった。

「おお、乳があんまり具合いいんで忘れるとこだった。グチグチとうるせえ口には、しつかり栓……しとかないと、なッ！」

一瞬馬面が余計に醜く歪んだ——そう感じた瞬間にはすでに牡肉の粘液で汚れた突端が唇へと押しつけられていた。

——ぢゅぶぶぶう……！ ぐりつ、ぐりぐりイッ！

「んんっ、んんぐう——ッ!？」

易々と乳谷から唇まで飛び出た長大な肉茎がグリグリと押し当てられる。間近で嗅ぐと纏わりつくような生臭さに眉根がさらに歪む。嫌悪に震え懸命に唇を噛み締めるのも構わず、人外の馬鹿力によって強引に醜悪な亀頭部分が生娘の唇をムリムリと割っていく。口



腔へと到達した肉棒は歡喜の声を表す代わりに、ブルリと震えて先走りのツユをトロリと吐き零した。

——ずむうッ！ ずぶぶぶううッ！

(に、苦しい……嫌、口の中が穢れるう……)

排泄器官を口に含まされたという屈辱。愛しい男すらいない、接吻さえ経験していない無垢な唇を汚されたことに、言い知れぬ恥辱を覚えた。嫌悪感と一気に口内で広がっていく苦みばしった味わいとに、耐え難い吐き気が胃の底から込み上げてくる。酸っぱい汁がえずくと共に喉を逆流し、舌を伝って口腔に埋まる巨大肉幹の脇を垂れ落ちていった。

「ぐおおっ……ちッ、狭えなあ。人の牝は口ン中まで小さくていけねえ。ヒヒッ、股穴はちっこくて締まるのがいんだけどよオ」

牡肉は興奮も露わに、ドクドクと血流を強め一層硬さを増していく。小さな唇一杯に広がる高揚した牡の体温と、勃起の硬さの中に混じる肉の柔軟さとに目を剥き驚愕する。

「んむっ、むぐっ、んえ……うんうううッ！」

口の中に溜まった逆流胃液を零さないよう、唇をきつく窄めた。自然と、啜え込んだ肉勃起を刺激することにもなってしまう。牡肉の熱に怯えながら少量ずつ胃液を飲み込み胃袋に押し戻しながら、混じった先走り汁までも腹の中へと滴らせる。飲めばカッと胃が熱くなる、淫液。不快なはずなのに、またしつとりと股間が湿るのを感じていた。牝として遺伝子に刻まれた性欲を刺激してやまない、鼻に絡む牡の臭気がそうさせるのか。

（だ、めだつ……堪えなきや、ああ、ここで流されちゃ……沙津樹っ、お願いい……。お姉ちゃんに力を貸してえええつ……！）

もじもじとすりあわされる股座はすでに袴に染み出すほど蜜を漏らしている。激しい戦闘中から汗をかき続けた下着の中は、性的な興奮で発汗したせいで相当に蒸れてしまっていた。内側で力なく揺れる膝を異形に見られてはいない、そのことだけがわずかな救いのように思えた。

喉奥にどつかりと腰を据えたカリが、圧倒的な存在感をもって口腔を蹂躪する。わずかな前後運動のみしか行っていないにもかかわらず先端から粘つく汁を吐き続ける侵入者に、汁を注がれ続ける胃が拒絶反応を起こし、むせ返りそうになった。

「ヒヒイーン！ さあ、そろそろ……本気で突かせてもらうぜエ！」

——グボオオッ！ 又ボヂユヂユウッ！

「んむふううううッ!? んん、んぐむううンンう……ッ！」

長い舌で勃起乳首を巻き取り、軽く弾くと同時に妖魔の腰が加速する。鋭く喉奥を擦る体重の乗った一撃一撃に、巫女の瞳は驚愕で見開かれ、暴虐を受ける喉は小刻みに痙攣して異物を吐き出そうと健気な反抗を見せていた。

「んぶつ、ぶぶう……んはあつ、は……んんぶぢゆるうッ！ げぶ、んんうん……ッ！」

乳谷から飛び出た牡肉の先端が唇をめくり出入りするたびに、泡立つ淫汁を啜る水音のほかに、蛙が潰された時のようななんとも無様なくぐもった声が響く。

(あたしの唇が、こんなみつともない声を出してゐるって言うの……？ 嘘、嘘よおッ！)

普段は勝ち気な言葉を発するばかりの口が、今は惨めな音を零すだけの牡の性欲処理器官に成り下がってしまったている。響き続ける淫音につくづく現状を思い知らされ、真希は屈辱のあまり思わず瞳を瞑ってしまったそうになった。

「コラ、勝手に目え閉じるんじゃねえッ！」

——グボブブウッ……ズヂユンッ！

「はごお……ッ！ はぶぶむうん……！ げふつ、うえ……えふふう……ッ！」

強烈な突き上げに、喉が震えた。声帯器官を潰されてしまうのではないかと感じるほどの衝撃が繰り返し発生する。硬い切っ先で押される喉奥が怯えて震える。強すぎる衝撃の連続に、いつしか戦巫女の口腔内は感覚が麻痺しつつあった。ただ、舌先で感じる牡汁の苦い味わいだけが、真希の精神をじわじわと侵食していく。

(胸、痺れちゃう……化け物の性処理に使われて、んくう……穢されちゃってる……)

高速で擦られ続けた乳肌は赤く腫れ上がり、ジンジンと鈍い痛みを響かせた。抽送の都度馬の下腹部が押しつけられ、黒々とした牡の縮れ毛に下乳がじよりじよりとくすぐられては微細刺激に震える。たすきのおかげで必要以上に乱れぬ白衣の状態が、髒られ汚れゆく乳肉との対比で、余計な猥褻さをかもし出していく。

ポニーテールを揺する馬の荒々しい鼻息が生暖かい風を巻き起こし、人でない存在に髒られているのだという意識を強烈に巫女の心に刻みつけた。被虐の心持ちを押しつけられ

る中で、ただただ喉と乳房だけが過敏に牡の体温や濃密な味わいを感じ取っていく。

「はぶぢゅっ！ ぢゅぽっ！ んんはあ、ひ、ひゃああ……臭いの、もう抜いへえッ、んぶあ！ はっ、はあっ……汚いの抜きなさいよお……ッ！」

「減らず口の収まらねえ牝ガキがッ！」

——ガズンッ！ ズゴッ！ ゴプッズブウッ！

「んぐぶふううう……ッ！ んごっ、んんぐう！ えふっ、げぶぶふうう……ッ！」

戦巫女の心根ごとへし折るかのように、がむしゃらで力任せに屈強な妖魔が腰を叩きつける。掻き回された口腔内では牡の粘濁汁と娘の唾液とが混ざり合い、攪拌されてよりネバつきを増していった。混合液は肉勃起の抽送の手助けとなり、さらに泡立ってネバつきを増すという悪循環。

嚙下しようにも、濁液は喉に引っかかってなかなか垂れ落ちていつてはくれなかった。

(苦しいつ、早く、早く終わってええ……！)

喉に絡む淫液の、胸に詰まるような息苦しき。臭気漂う肉棒で喉を突かれ、乳房を颯られて——ただ、苦しいだけだ。だが巫女がそう思い込もうとすればするほどに、胸の奥底で滞留するもう一つの感情が疼きだす。

「ふう、ンン、んぶうっ！ あああ……ッ！ お乳が、熱い……！」

醜悪な牡肉で抜き立てられる肉鞠の谷間を中心に、ウズウズと乳首を震わせる小さな快楽が、抑え難い淫欲のともし火となって次第に強く点りつつあった。それは、勃起肉棒が

雄々しく震えるたび、先端から吐き出したカウパー汁を腫れた乳肌へと擦りつけて浸透させていくその都度高まっていく。

「ヒィッ、ヒィン……！ ようやくその気になってきやがったかア」

牡馬の肉棒がずぶりと乳谷を抜き立てるその都度、火照った肌は全身へと淫靡な熱を伝導する。誘発された股下で肉突起が包皮をめくり、茂みからひよつこりと顔を覗かせた。そのことを真希は下着と肉豆との摩擦で否応なく思い知らされた。

「あっひィィィ！ ちが、ああ、んくうンン！」

感じているのではない、そんなはずはないと、心の中では懸命に否定し続けた。それでも、じつとりと股から染み出した蜜液が下着を汚し、太腿を伝って垂れてきていることは自覚せずにいられない。異形の舌で舐め扱かれる陥没気味の乳首も、少しずつ膨らみを増して桜色の乳輪から顔を覗かせ始めていた。

馬の舌が這わされれば望まぬ快楽刺激に腰はガクガクと震え、健気にも乳丘と秘丘の、計三個の桜色突起が過敏に反応してしまう。

「どうして、こんなあ……無理矢理なのにつ、感じてるはず、ないのにいつ！」

最初に疑ったのは、牡の体液に媚薬効果があるのではないかということだ。

「ヒィィ、そりゃねーよオ。この俺様が、そんな姑息な手を使うわけねエだろオ？」

だが、疑いの目を向けられた牡馬は即座に真希の予想を否定してみせた。その言葉が信じるに足るものであるかは甚だ疑問ではあったが――。

「んく、くうあ……だとしたら、どうしてっ……?」

荒く乱れる息が、乳肉の上に吹きかかり、全体をべっとり汚し尽くした牡の粘液を乾かしていく。すでに一部がカピカピになっていた粘液が息に揺られている様は、戦巫女の心に奇妙な物悲しさを覚えさせる。ふらふらと儚げに移ろい始めた巫女を精神を貶めるべく、牡馬はとどめの一言を長い舌先から滑らせた。

「決まってるア。お前が、スケベな牝だからだよオ。お前は、男に弄られれば誰彼構わず股を濡らす、エロオンナなんだよオッ!」

「……ッ! ば、馬鹿なことを……。あたしは……違うッ! そんな、女じゃないわっ……。ちが……うわよおっ……」

違う。違わない。淫乱だ。淫乱じゃない。目まぐるしく移ろう思考が、戦巫女の心をやすりで削り落とすかの如く磨耗させていった。胸の先っぽから感じる快楽を受け入れてしまえ——そんな甘い囁きに、不慣れた悦楽に浮かされた肉体は一気に傾き、堕ちていく。

「おおらア! もう一度、目一杯奥まで啜え込みやがれえええエエッ!」

——ズヂユボボオオオッ!

「いふあつ、あむつ、ぐぶううう! んぼつ、ぢゅぶぶう! んふあ、ひぐむううん!」

馬の蹄が真希の頭をホルドし、ポニーテールを掴まれて、あまりに長大な剛直をずぶずぶと限界まで啜え込まれる。戸惑い、彷徨う巫女の口中で、突き込まれた牡の先端がぶくりと一際巨大に膨張した。粘つくカウパー汁が舌先で一斉に放たれたのを感じる。さ

らにタイミングをびたりと合わせて同時に右の乳首を舌尖が舐め擦っていく。

(な、なに、かがあ……くるうううッ！)

苦みばかりの汚濁を飲まされる屈辱。唾液に濡れた乳肉を伝う快樂信号。ドクンと跳ねた心臓の音を、真希は確かに聞いた。

「出してやるぞォ！ 飲め、一滴残らず喉に流し込めエッ、ヒッ、ヒヒイイ——ン！」

馬頭妖怪の肉棒が巨大に膨れ上がり、口内での存在感を増していく。繰り返される脈動。そのたびに大量に喉元に噴きかかる透明汁にむせ返り、息継ぎのために鼻を無様に鳴らして汚濁を懸命に飲み下しながら。真希は心中で声ならぬ拒絶の叫びを張り上げた。

(嫌だァッ……出すな、臭い汁をあたしの口の中で出すなァァ……！)

——どぼびゅッ！ びゅぐぶぶううう——ッ！ びゅぢャッ、ぢゅぶぶ、どくく！

大量に噴出した汚濁があつという間に狭い口内を満たしていく。なみなみと注がれる牡の味わいに腰が砕け睫毛が震える。牡肉の脈動を敏感に感じ取った戦巫女の舌が、無意識の内に同調して小刻みな振動を加えた。

「あぐ……んぶぶつ！ ぶぶう！ ぶぼッ！ ……げふつ、うぐ、ごぶ……んぶぶう！」

突然に舌の上を滑ったどろりとした感触に、目を剥き首を振って抵抗する。獣臭の数倍にも匹敵する生臭さと、舌をひりつかせる苦みが口中で唾液とブレンドされ、堪らぬ不快感をもたらししていた。初めての口内射精。忌まわしき異形の牡に、強引に口腔を穢された口惜しさに、屈辱でまみれた心が打ち震える。

今すぐにも吐き出したい。なのに、がっしりと蹄で掴まえられた髪の毛は解放されるはずもなく、首を振つての拒絶すら許されずに最後の一滴までを飲み下させられてしまう。粘性の汁が喉を滑り落ちる感覚に、怯えた腰がガクンと崩れ落ちる。

「ヒッヒイ！ 舌を這わせる。こびりついたのも、綺麗に舐め取るんだア！」

牡馬によつて顎を掴まれ、射精器具と化した巫女は倒れ込むことすら許されなかった。

（あ、ああ……やあ、もう、出すな。お腹タプタプして……もう飲み込めなく……）

喉を滑り落ちていく濁液の熱さに脳髓が灼かれ、身体の内側から作り変えられていく錯覚なのか確信なのか、それすらも自分で判別できぬ混濁した意識の中。土蜘蛛の糸で四肢を支えられ、快樂の高みに上り詰められなかったことを惜しむ自分に気づかされる。真希は、ショーツに新たな蜜の泉が形成されているのを感じていた。

「ふえつふえつ。どうじゃったかの？ 愛しいお姉さまのはしたない姿を見た感想は」

静寂が支配する洞窟内に、老人妖魔のしわがれた声が響く。

「ね、姉さま……そんな……ッ」

妹巫女は尊敬する姉が無残に負け、あまつさえ幾度となく夢見た巨乳が醜い異形に犯されるのを、信じられぬ心持ち半分、興奮半分で見届けた。はだけた袴の下、濡れた下着が高揚で溢れた新たな蜜がじわりと滲む。

老獪な敵が見せた幻影であつて欲しい。けれど煽情的な姉巫女の表情は意識にこびりつ

いて離れてくれない。混乱する意識が、冷静な巫女を惑わせていく。

「解いて！ 今すぐ解きなさい！ 姉さまを助けに行かないと……んくうッ！」

少女は激昂に駆られるままに叫び、手足を暴れさせた。姉の傍に行きたい。今すぐはせ
参じ、共に馬面妖怪を、ぬらりひよんを倒して、また満面の笑みを交わしたい。大好きな
姉の手で頭を撫せてもらうのだ。洞窟に潜る前、沙津樹が夢想していたように――。

「暴れても、わしの触手は千切れぬが……どうしても、姉ちゃんのもとへ行きたいかえ？」

老人妖魔が皺くちゃの顔を近寄せ、臭気漂う息を吐きながら問いかけてくる。臭い息
遣いに顔をしかめつつ、沙津樹は視線を背けずに真っ向から敵を見据えた。

「わしの言うことを聞いてくれれば、解いてやらんこともないんじゃがお」

「あなた……の……？ し、信じられません、そのような甘言……」

陰湿な口先だけの笑みに、不審が渦巻く。敵である目前の老人が、進んで拘束を解くと
言う。お人よしの妹巫女にも、にわかには信じ難い提言だった。

――ぎしっ、ぎししっ……。

はだけた胸元を気にしながら手足に力を込め、触手を引き千切ろうと試みる――やはり、
葛がしなるばかりでびくともしない。瞳を閉じ掌に呪力を集中させようとしても、まぶた
の裏に焼きついた姉の痴態がちらつき、妨げられてしまう。他に打つ手立てはない。

(ダメで元々。それで、姉さまを助けられる可能性が少しでもあるのなら……！)

姉の安否に執心する妹巫女は、分の悪い賭けに打って出ることを決意する。

「くふふ、お股がぐっしよりと湿っておるぞ。姉のはしたない姿で興奮したのじゃろ」

老人のからかいに頬を染め、次の瞬間キッと睨みつける。ぬらりひよんは会話中もずっと少女の湿った下着の様子を窺ってきていた。じつとりと湿った蜜が腿を垂れ落ちる感触に、一層羞恥が募る。姉の痴態を望まぬ形であるとはいえ見せつけられ、胸を高鳴らせてしまったのは紛れもない事実だ。

「さて、どうするのじゃなあ？ わしは別にどっちでもええんじゃがのオ」

急かすように口を滑らかに動かし続ける妖魔の言い草が、挑発であることは明らかだ。わずかでも隙がないものか言葉の端々に注意してみたものの、やはり老獪な妖魔に手抜かりがあるはずもなかった。

（くう……やはり、条件をのむほかにはないのね）

老人の言葉を信じていいものか、まだ不安は残る。それでも、眼前でニタつく心根のねじくれ曲がった妖魔を潤む瞳で見つめ、巫女は震えながら言葉を紡ぎ出した。

「どう、すれば……いいのです。貴方の言う条件をのみますわ。ですから私を姉さまのもとへ行かせてくれると、約束……してください」

ありったけの勇気を振り絞って、首を縦に振り承諾の意思を示す。どのような条件が出されるのか、これまでの老人の言動からすでにおおよその予想はついていた。どんな卑猥な要求でも姉のために耐えてみせる。拘束された手をぎゅっと握り込み、速まる鼓動を必死に静め。ニキビ一つない額に玉の汗を浮かせ、緊張に強張った面持ちで敵を見つめる。

老人妖魔は不敵に笑みを零し膝を揺すって貧乏ゆすりをしつつ、じっと少女の決心を見守っていた。澀んだ眼差しが巫女の袴をじろりと凝視する。

「それでは、まずは右手だけを解放してやろうか」

「ぱちん！」老人が指を鳴らすと、あれほど強固に腕を締めつけていた蔦の群れが瞬時に妖魔の衣服の中へと引っ込んでいった。久方振りの自由にまず真っ先に胸元の乱れを正してから、右腕の五本の指を動かしてみる。だが、まだ安堵はできない。交換条件をなかなか言い出さない敵の焦らしに無闇に不安を掻き立てられ、素直な巫女は表情に内心の動揺をはっきりと映してしまふ。

その不安に怯える面持ちをじっくりと堪能したあと。ようやく老人の唇が動いた。

「肝心の条件じゃが……わしは女陰、前の穴よりも、ケツ穴のほうが好みでの」

「……ッ!? な、何を急に」

予想外の告白に驚き怯んで、声をなくした少女には目もくれず、老人は言葉が続ける。

「その手で、自らの尻穴を弄くり回してはくれんかの? ……尻穴で自慰をして欲しいと、こういうわけなんじゃがねエ」

じわじわと責める執拗なやり口同様の緩やかな口調で言い終えたあと、老人妖魔はニタリと眉尻を下げ、舌舐めずりを繰り返しながら沙津樹を見つめてきた。幾度視線を交わしても不気味な澀んだ眼光に、背筋を寒気が駆け抜ける。視線から逃れるように、少女は心中の葛藤に没頭していく。

(この醜い男の前で、お、お尻を弄る？ そんな、はしたない……あぁ、で、でもっ)

姉のためだ。免罪符ともいうべき想いが少女に決心を促す。自由になった右腕で前髪を掻き上げ、慌てて冷や汗を拭う。姉の仕草を真似てみて、一層思慕が募った。心なしか尻穴がうずうずとしている気にまでなってくる。震えている右手を隠すように胸の上へ押しやり、高鳴る鼓動に急かされる様に、沙津樹は言葉を紡ぎ出していく。

「やれば、いいのでしょう！ お尻で、自慰をさせていただきます、わ……」

自棄気味に金切り声を上げてから、少し後悔する。これからのような卑猥な行爲をさせられるのか、見当さえもついていない。尻穴で性感を感じるなどということがあるのかさえ理解できずにいる中で、早まってしまったのではないか。不安は拭いきれない。

未知の快楽にわずかばかりの期待と、大いなる不安、姉のもとへ早く参じたいという焦燥を小さな胸の奥にない交ぜで抱え込む。耳の先まで赤面し俯く戦巫女を、老人妖魔が淫猥な面持ちで見つめていた。

「そのままでは、さすがに恥ずかしいじゃろう、心づくしの手向けじゃ」

——しゆる、しゆるるるる！

「えっ、あ、な、なにを……待って——」

俯いていたために反応がわずかに遅れる。これまで四肢を拘束されていても辛うじて平静を保てたのは、ひとえに視界が塞がれずにいたからだ。それが、頬に飛びつきまぶたに幾重にも巻きつく葛触手の群れによって瞬時に塞がれていく。首筋から、うなじを掻き分

け、耳たぶをよじ登り。四方八方から飛びつく触手が、こぞって少女の瞳の上に巻きついてくる。

抵抗できぬまま肉体の五感が一つ奪われていく。なすすべのない自分が、手足を縛る鳶の群れが酷く恨めしく感じた。

——ぞくぞくぞくうッ！

「ひ……くうあ！ あつ、は……ど、どうしてこのようなことをっ」

うなじをよじ登りくすぐる鳶触手の微細な蠢きが、さも強烈な蠕動であるかのように感じられる。暗闇に支配された視界によって、一層肉体の感覚が鋭敏になった。敵の気配を読む沙津樹特有の能力もあり、肌を這う無数の鳶の感触がより鮮烈に感じられ、意識の集中は妨げられ続けた。

種々雑多な触手の牙が、吸盤が肌を擦るたびに、ぞわぞわと背筋を駆け巡る快感が腰を痺れさせ、緊張していた巫女の心を淫悦で解きほぐしていく。漏れ出そうになる甘い声を舌先ぎりぎりのところで飲み込み、沙津樹は気配だけで妖魔のほうを振り向いた。

「なあに、幾らなんでも嬢ちゃんが恥ずかしいじゃろと思うての。……じゃが、もしや目隠しされたほうが燃える、とか言うのではなかるうな？ ふえふえふえッ」

「く、うう……ふざけないでっ。そのようなこと、あるはずがないものっ」

完全に弄ばれている。屈辱と恥辱にまみれた我が身を憐み、これから与えられるであろう淫墮の行為に備えるべく腹に力を込める。覚悟を決め、開かされた股の下方へと恐る恐

る、唯一自由になる腕を手探りで下ろしていった。今は老人の条件に応じるほか、手立てはないのだ。

「んんっ……」

くちゅり……。めくれた袴へと潜った指先が湿った水音を響かせ、下着の上から恐る恐る小さな窄まりをやわやわと撫ぜる。触れた瞬間きゅつと尻穴が縮こまったのを、下着越しに感じた。快楽とまではいかない、わずかばかりの違和感。排泄にしか使ったことのない狭穴を、敵の目の前で弄っているという事実が、少女の恥辱を一層に煽り立てていく。

(今の、な、なに……？ お尻で感じるはずなんてないもの)

きつと驚いて窄まったにすぎない。そう思い直して、また下着越しに優しく窄まりを撫ぜる。今度は肛門周辺の皺に沿うようになぞり上げていった。

——ゾク、ゾクゾクッ！

じわりと尻たぶを熱くする、淫夢の中の出来事のような浮遊感。だが、股間にむず痒く走る小さな痺れは紛れもない現実であることを示している。

「ふう、あ、ああ……お尻でっ、嘘、うそおっ……」

痛痒はじわりじわりと股下から下腹、縦長のへそを通り抜け、巫女の全身へと緩やかに浸透していく。肌を伝う熱に浮かされたが如き高揚感が、たまらなくもどかしい。もっと強い刺激を——視界を塞がれたことで性感を高められた身体が、切実にそう望んでいた。

「ふう、ふうう……！ 姉さまのため、なら何だってできる。だから、なのお……ッ！」

唇が建前を繰り返す間に、徐々に下着に食い込ませた五指は力を込め、窄まりへの刺激を強めていった。クニクニと押し込んでいただけだった指先が、ぶぶぶと卑猥な粘着音を響かせながら蕾へと沈み込んでいくようになる。

「ほお。もう腸液を滲ませるようになったのかえ」

（お尻も、弄ると濡れちゃうんだ……お股の、穴と同じ……）

指先に感じる汁をニチャニチャと遊ばせ、妖魔のもたらした未知の性知識にうっとり陶酔しかけて、ハッと意識を引き戻される。これは老人に強制されて嫌々ながらに行っている行為のはずだ。こともあるうに淫らな気持ちになることなどあつてはならない。慌てて尻を弄っていた指先を口元に咥え囓んだ。

「……つく！ んう……ふう……つふああ!？」

痛みで快楽を誤魔化すつもりだった。それなのに、咥えた指先から滴る蜜が舌を滑り喉奥へと吸い込まれた途端、ぴりぴりとした味わいと共に脳髓を電撃が奔り抜ける。昔戯れに味わった陰門の蜜とは全く違う、苦みの多分に混じった味。舌が初めての味に戸惑いながらも、プルプルと震えている。

（な、に。これえ。これまでに口にした食べ物の、どの味とも違うっ……すぐく、きつい匂いと、しつこくて……癖になりそうな味い……）

己の分泌液を啜るといふ異常行為に没頭する。そんな飽くなき欲望を己が持っていたことに驚き、自分自身に戸惑いと、言い知れぬ恐怖を覚えた。それでもなお指先を這う舌の



動きは止まらない。

我を忘れ、己の使命も課せられた条件も忘却の彼方へと押し流し。繰り返し、舌先で親指、人差し指と順番に、小指の爪まで丹念に舐めしゃぶる。少しでも匂いや味わいが残っていないか確認するため、小指が終わるとまた親指へと引き返し何度も舌を往復させた。それが老人の言う腸液が下着を染み出したものであるということに、ようやく気づく。

「おうおお。まさかこうも早く虜になってくれるとはの。美味いか、己の尻汁は？」

目隠し越しでも、老人の視線を股の付け根に感じる。ぐっしよりと絶頂の残り汁と新しく染み出した腸液とで湿った、淫靡な甘酸っぱい残り香を漂わせるレース付下着。その中心部、押し当てていた沙津樹自身の指の形に凹んだままの後方の窄まりに、ねっとり執拗な老人の視線が張りつき蠢いているのはつきりと感じられた。

「や、やめなさいっ！ そんなにじつくりと、見ないでっ……」

胸の鼓動はドクドクとまた早鐘のように鳴り響き、羞恥と被虐の狭間で振幅大きく揺れ動き始める。無意識にモジモジと動く尻たぶに、汗とも蜜ともつかぬ液体が伝う。淫汁の芳しさに誘われるかのように、皺だらけの指が前触れもなくペタリと触れた。

「ひあ！ やっ、約束が違うわ。わ、私が自分自身の指で弄ると……くふうあ！」

「ふえふえふえ。思ったとおり、コッチも相当に素質がありそうじゃのオ」

股布に密着した老人の指先が細かな振動でもって刺激を加えてくる。純白の下着にくつきりと浮かんだ一筋の黄色い染み。その上を的確に滑り撫でさする振動に、胸の鼓動は一

層乱れ、熱い吐息が唇を漏れ出る。

「ひく！ は、離しなさ……くふううんッ!?」

グイグイと尻穴を強めに押されれば、細い腰が一際高く跳ね上がり、ぶちゅり……とはしたくない水音を立てて淫らな汁が窄まりから弾けた。未知の部位から注がれる快楽の連続に、くらくらと眩暈がする。高鳴り続ける鼓動を止める術もなく、巫女は全身から大量の汗が吹き、白衣に染み込んで重たくのしかかるのを体感していた。

「ほおれ、ほれ！ 尻穴が気持ちいいのか？ そうなんじゃろう」

「違いますっ、絶対に違うッ！ 私は戦巫女だもの……姉さまのために、頑張るんだからっ、あひッ！ いああ……ああくうッ！」

しつこく縦筋の上を不潔に伸ばした爪で抜く皺くちやの指が、薄布を染み出した蕩ける蜜を掬っては再度下着に擦りつけていく。ヌチャヌチャと洞窟の暗闇に響く淫音は次第に大きくなり、目で見えぬ少女の耳元に鮮明に響いて一途な心を掻き乱した。

太腿が勝手にプルプルと震えている。足袋の内で足指が丸まった。穿いているのが気持ち悪くなるほどに濡れそぼった下着の内側で、前の穴と同じくらい、いやそれ以上に茶色がかった汁が貪欲な排泄器官から滲み出しているのを感じる。

「くふう。指に匂いが染みつきそうじゃな。芳しい処女の尻の香り……ふえふえ、下着もすっきり黄色と茶色に染まりおって。もとが何色だったかなぞ、もう判別つかんわい」

純白の下着が穢れていく。まるで、肉欲を押し込めつつも清純であろうとした妹巫女の

理性が、欲望世界の住人たる妖魔によつて易々と外皮を剥がされていくかの如く。

(ダメえ……今ここで持ち堪えないとおつ……。きつと、もう帰つてこれなくなるッ！)

快楽に弱いことを自覚しているがゆえの確信だった。快感と理性のせめぎ合いがよいよ正念場を迎え、腰がビリビリと痺れて淫悦に咽んでいることなど、きつと目隠しの向この老人にはお見通しなのだろう。

それでも、誘惑に負けず耐えきつてみせれば、必ず状況を打開する転機が訪れる。そう頑なに言い聞かせて、少女は脚を突つ張らせ、下唇と可憐な舌を千切れんばかりに嘔み締めて、半身を襲う淫悦の渦に耐え忍ぼうと踏ん張っていた。

「しぶといの。……なれば、そろそろわしの可愛いこやつらにも、助平な尻を味わわせてやるとしようか。くふふつ、そおれ！」

——じゆる、じゆるるるる！

「ヒッ……い、やあ……触手は、もうやあ！」

ボコボコと老人の纏う着物が所々で膨れ上がり、窮屈な寄生場所から瞬時に飛び出した無数の触手が汗ばむ巫女の肌へとよじ登ってくる。視界を塞がれた中での肌を這う奇怪な感触に、悪寒が背筋を伝う。太腿から張りついた触手群は純白ショーツただ一箇所のみを目指し進軍してきた。

不気味に匍匐前進で這いずる異形の触手の、ジクジクと汁を染み出すぬめった表皮やイボだらけの吸盤。鋭い牙で肌を噛まれて痕跡を刻みつけられる。それら全てが先刻凌辱さ

れた、まだ真新しい忌まわしき記憶を呼び覚まし、肉体をすくませるに充分なおぞましさを備えていた。

ヌタヌタと塗り込められた汚液のヌルつきにも大分慣れ、自然と快楽が芽生えている自分の肉体もまた、巫女の精神をすくませる。拘束され、視覚も奪われ、自分の意思に反して肉体がどこまで墮とされてしまうのか、そのことが何よりも恐ろしい。

「ほれえ……存分に尻汁を吸い取ってやるがよいぞオ……ふひ、うひゃひゃひゃあ！」
「い、や、やめつ……ひくうあああああ！」

老人の哄笑に続いて、雑多な触手がこぞって股布へと殺到した。頼りなげな布の紐部分を尖った牙が切り裂き、千切れた布切れはすとんと落ちて太腿に張りついた。

「やつ、ああ、見えちゃう……ふぁんッ！」

群がる触手の歪な視線がふつくらと膨らんだ恥丘に集中するのを感じ取り、奇妙な自尊心にも満たされた。己の漏らした蜜でテカリ濡れ輝く陰毛の一本一本までも見透かされたような執拗な視線と期待に満ちた蠢きとに、言い知れぬ被虐の感情が胸に沸く。きゅんと締めつけられた股下で、また新たな蜜がしぶいた。

「おうおう、あまりご馳走してやらんでくれ。太りすぎて、わしの服に納まりきらんようになつては困るでのオ。……それに」

——つぶぶつ！

「くひィああ!? あぐ、うああ……お、ひりいい！」

整地されぬ地面は所々に石が出っ張り、袴越しに引き摺る両脚の膝が、無数の微細な擦り傷による鈍痛に晒される。脱げ落ちた草履を探すという発想も、淫欲に追い立てられた妹巫女には浮かぶはずもなかった。

妹巫女はそれでも歓喜の心持ちで胸を満たし、のろのろと姉へと近づいていく。もしも尾てい骨から尾が生えていたなら、きつと左右に大きく揺れていることだろう——それほど淫靡に神聖な朱袴に隠された双臀はくねり、淫らにフリフリ振りたくられていた。

「沙津樹っ、やめなさいっ。来ないで、みっともない姉さんの姿、見ないでええッ！」

起き上がる余力もなく、沙津樹と同じ四つんばいの体勢で牡馬に秘部を貫かれたまま。姉巫女は沈痛な、実の妹が一度も見たことのない暗く沈んだ面持ちで必死の嘆願を繰り返している。初めて見る姉の、女としての表情が、余計に沙津樹の情欲を刺激するというのに、姉は気づく風もなく淫靡な香りを纏い、愛しい泣き顔を差し向けるのだ。

「おねえ……ちゃん。可愛い……ですわ」

そして、ついに手を伸ばせば届く距離にまで妹巫女は這い進み、姉巫女と繋がりあう二体の異形の左側面へと近寄っていく。「お姉ちゃん」。真希をそう呼ぶのは一体何年ぶりのことか。少し気恥ずかしく、微風になびいた己の黒髪を一束、きゅっと口に咥える。咥えた黒髪は、少し塩辛い汗の味と臭みのある牡汁の匂いを纏っていた。口中に広がる味わいに、胸の先と股間の上部で、それぞれの突起が膨張し、衣服に擦れて酷く疼く。

沙津樹の快楽に蕩けた表情に、背後で飼い主のように佇んでいた老人妖魔が、皺だらけ

の顔をさらに歪めて残忍な笑みを零す。

「それではアレを見せてやろうかの……」

よたよたと近寄った老人の萎んだ手が沙津樹の、牡汁に染まり色褪せた朱袴を掴む。そして躊躇なく一気に裾をめくり上げた。袴の裾は汗ばむ尻たぶにべたりと張りつき、美臀を隠すものは何一つなくなってしまう。ふるふると寒さ以外の感情で揺れ動く尻肉の谷間。だが、姉妹の目を奪ったのは熟れて丸みを増した尻ではなかった。

「さ、さつきっ……それっ……!!」

「え……あ、んんうっ、な、なにっ……なんだかお腹が、きゅんきゅんしてええッ!」

「ぬふふ。壯観。絶景かな」

小柄な背を屈め、淫猥な目つきで覗き込もうとするぬらりひよん。彼が見つめる先、そして相對する姉妹が見つめる、沙津樹の股根。しつとりと湿った茂みが肉丘に張りついたその上部で、ソレは異様な存在感を放っていた。

——ぶるんっ……びく、びくびくうッ!

「ひあああ! あ、暴れるう……ッ!」

妹巫女の甘い声に合わせて、彼女の性感帯——女性器の上部に位置する陰核だったモノが、上下に大きく飛び跳ねる。自らの目で確かめていなければ、きつと忌まわしい甲虫が目を覚まして暴れ始めたど錯覚しただろう。けれど、実際には沙津樹が気を失っている間に、陰核を責めていた蟲は取り払われている。

「お、お前たち、沙津樹のッ、あたしの妹の身体に何をしたのよッ！」

怒りに燃える姉巫女の声。実の妹である沙津樹が聞き慣れた、毅然としたいつもの姉の声質だ。通常であれば頼もしく思える姉の声でさえ、火照る肉体を持って余す妹には妖しく色香を帯びて聞こえる。

「姉さまあ……あくつ……お股が、もどかしいのおっ……」

元々やや大きめだった、勃起時には小指の先ほどになる少女の肉芽。それが今はその数倍、いや十倍以上にまで膨張し、異常なまでに長く伸びている。肉の幹部分には筋が浮き出て、意志が宿ったかのように脈を打つ。その長さおよそ三十センチ。妹巫女の陰核は、今やまるで男性器を模したかの如き長大な肉の棒と成り果てていた。

沙津樹の官能が刺激されるその都度肉勃起は猛々しく跳ね、女の身では味わえぬはずの快楽を巫女にもたらず。じわりと胎の奥で滞留する女の快楽とはまるで違う、刹那的な鋭い刺激。肉棒を突き抜け、脳天まで蕩かせる魔性の媚薬。

初めての感覚は思考を混乱に陥れ、不安と快感とをごちゃ混ぜにさせる。

姉を貫く牡馬も、はるか頭上で見下ろす鬼も、背後のぬらりひよんも。三匹の牡はみな、一樣に口元をほころばせ沙津樹を見てせせら笑っていた。

「それ、触ってみるのじゃ。……逸物を抜け。さすれば今以上に気持ちよくなれるぞえ」
「沙津樹っ、ダメよっ！ 騙されてはだめえっ！」

老人の誘惑は抗い難い拘束力をもって巫女の心を縛り上げる。姉の懇願が妹の官能を昂

らせる。最強の刀を造り出す戦巫女の細い指が、濡れた白衣とはだけた袴を通り過ぎ、ゆるゆると淫猥な形状の肉勃起へと近づく。ピンと勃った肉厚の幹は、生まれたての赤子の肌同様ツルツルときめ細かく、青筋の浮いた根元部分をしきりに震わせていた。

（姉さまが見てる。惨めな身体の私を……その前でおちんちんを抜く……なんて。はしたなすぎだわ……ああ、でも見て欲しいっ……姉さまに私の全てを見て欲しいのっ……!）

肉体の変化に戸惑い戦く気持ちだが、目先の快楽によって塗り潰されてゆく。墮落した肉体に引き摺られ、修行により培った高潔であろうとする精神までが墮ち始めている。ついに、姉の見ている前で沙津樹の指先が、生まれたての肉の幹に密着した。

——ビクッ、ビクビクンッ!

「はひんッ! あふうう! すご……痺れ……のお! ウズウズして気持ちいいイイ!」

軽く触れただけで、生まれたての肉棒は過敏な反応を返してきた。指で撫でた部位からズンと重たい衝撃が肉棒の先端にまで伝導する。腰に纏わりつく袴を疎ましげに払い、もう一度、幹の裏側を指でそつと撫でる。もう一度、さらに一回。

「はくうんっ! 姉さまあつ、指がっ、指が止められないよおっ!」

「さつきいいっ……もうやめてえッ!」

裏の縫い目に沿って指を這わせれば、はだけた胸元で二つの桜色突起が激しく突き出て色濃くなるほどに強い刺激を発した。そのことに気づくと、繰り返し筋ばかりを擦る。だらしなくよだれを零し、淫靡に呆けた瞳で肉棒と姉を交互に見やる。覚えてたの猿という

表現がしつくりくる媚態に姉が目を背けても、沙津樹の指が止まることはなかった。

——しゅっ、しゅにゅぬっ……しゅこしゅこしゅこッ！

「くはあ……ッ、はひっ、ひくうん！ すごいっ！ 感じすぎちやうのおおッ！」

擬似男根から立ち昇る快樂刺激は決して飛散することなく体内に留まり、下半身から順に肉体を陥落させていく。真下でパクパクと物欲しげに息づく淫唇は真っ先に官能の火で炙られ蜜を漏らす。乳肉を巡った快樂電流は乳頭の苛烈かつ急速な勃起を要求する。汗が冷めて肌寒さを感じだしたうなじに再び熱気を呼び込み、新たな汗を吹き出させた。

「やめろっ、やめろおっ……沙津樹は、沙津樹は渡さないっ……！」

ニタニタと下卑た笑みを零す妖魔たちに、姉巫女が深い怒りをたぎらせる。牡馬に掴まれた尻肉が袴ごとブルブル揺れ、鬼に寄りかかる腕をどうにか伸ばそうとして必死に脱出を試みているのが目と鼻の先の妹巫女にも十二分に伝わっていた。

（ああ、姉さま……強くて凛々しくて、ずっと目標だった。私の大好きな人。姉さまが、私のために怒ってくれて……）

姉の手助けをしたい。十五年以上もそうしてきたように、姉妹の力を合わせて生き残るために尽力しなければ。心の片隅で、わずかに残された理性が警鐘を鳴らす。姉妹が揃っている今が千載一遇の脱出の機会やも知れぬのだ。

しかし、それでも妹巫女は最後の決断を下せずにいた。姉の前で痴態を披露するという屈折した愛悦の儀式。もう少し、ほんの少しだけ牡としての淫悦に酔っていたい。乳首を

硬くしこらせ、熱く蕩けた肉体を駆け巡る悦楽から、どうしても逃れられない――。

じつとりと股下を染み出した蜜は姉の見ている前でずぶ濡れの黒い茂みを溢れ出し、ぼたぼたと地面へ垂れ落ちた。淫臭と淫汁で穢れた朱袴を左右に振りたくり、もじもじと腿を擦りあわせれば絡んだ淫蜜が泡立って余計に粘着性を高め、卑猥な水音を暗闇に覆われた洞窟に響かせる。

（ごめんなさい、姉さま……沙津樹は、弱い子ですつ。ごめんなさい……）

浅ましい水音をより欲情を掻き立てる音に変換するため、股間に這わされた沙津樹の指先は率先して腿と肉唇に染みた淫汁を掬い取り、大陰唇を撫ぜるようにして塗りつけていく。たっぷりの蜜が膣奥から漏れ出すと、躊躇せず人差し指と中指を揃えて膣口へ突き入れ、爪先で入り口の肉ピラを引っ搔いてお漏らし汁を掻き混ぜる。

擬似男根を掴む妹巫女の手は、撫でるだけに飽き足らず、行灯袴を盛り上げる肉の幹をゆつくりと擦り、ついに扱き始めていた。ニチャニチャと先走りの絡む音が、姉にも聞こえている。欲情を煽り立てるためだけに淫猥な粘着音を高々と響かせていく。

「愛しい姉様に見られながらするのがいいんじゃない？ 疼いて堪らんのかじゃろう」

尻肉の谷間を伝う蜜液を鼻先がくつつくほど接近してクンクンと嗅ぎ取られる。甘酸っぱい臭気を小柄な身体一杯に吸い込む老人は、執拗な責めで巫女を乱しておきながら、今はくすぐったい息を吹きかける以外には何一つしてこない。物足りない刺激で沙津樹の尻たぶが左右に揺れ、悶え苦しむのを愉しんでいるのだ。

「くう、んんうう……！ はっ、やあつ。くす、ぐつたあいいッ！」

振り乱した黒髪の毛先から、キラキラと輝く汗が飛び散っていく。艶やかだった髪質は急速の淫悦責めにより汗と触手どもの体液とで煌きを失い、紫がかつた透き通るような黒色はすっかりくすんでしまっている。腰の疲れも忘れて振りたくられる双臀にめぐり上げた朱袴の裾がずり落ちると、ご丁寧にも老人の手が尻肉に触れるか触れないかの微妙な距離で再度めぐり上げていった。

「おお、感じる、感じるゾ……！ 身体に、失った我が呪力が甦ってくる……！」

地響きにも似た鬼の咆哮が、姉妹巫女の耳をつんざく。間近で膨大な邪気に晒された真希は、声と同時に発散された邪気の余波に震え、身をすくませる。

肩先をずり落ちかけている白衣から覗く乳肉の尖端が、沙津樹の目を吸いつけた。昔一緒に入浴をしていた頃にはよく姉の目を忍んでは盗み見た憧れの巨乳。陥没気味だったはずの乳頭はぷっくりと浮き上がり、男勝りの姉が妹同様の快楽責めに喘いでいることを知らしめている。牡馬の巨根を咥え込んだ姉の尻が、時折ピクンと跳ねる、その淫靡な光景からどうしても目を離すことができない。

肉の内から燃え上がる淫欲の焰に、ひた隠してきた欲情という名の禁忌をチロチロと炙り出されながら、それでも鬼の腿に倒れる姉巫女の拳が懸命に呪印を結ぼうとしているのが視界に映る。姉は、まだ諦めていない。妖魔どもが勝利の確信に溺れ、鬼の復活がまだ完全でない今なら、呪力を振り絞っての逆転もあり得るかもしれない。



「どおれ、わしが直々に逸物の扱き方を教えてしんぜようぞオ。ふえつふえつふえつ」

「ひつ……あ！ さ、触らないで……えッ！ ふあん！」

腰に回された皺だらけの掌が擬似男根へと触れた瞬間、わずかに残る呪力が再び体内で飛散する。肉棒に添えられた老妖魔の手の感触に心奪われ、腰を淫らにくねらせて喘ぎ狂う。視線の先で、姉巫女の瞳が悲しみに彩られるのを、恥骨に奔る甘い痺れを味わいながら見届ける。悲嘆で潤んだ姉の眼差しを、今度は直視することができなかつた。

「さつ、きいい……つ、くあうんッ！」

「ヒヒイッ、お前は黙って見てろよ。妹がどんだけ助平なのかを……なッ！」

——じゅぶんんッ！

「はくあああああああ！ くふつ、いやああつ、もう、突き入れるなああ……ッ！」

目を逸らせても、耳から入り込んでくる男女の睦みだす淫靡な粘着音と、少しかすれ疲労を滲ませる姉の声が、沙津樹の胸を熱く焦げつかせる。映像で見せられたとおりの、姉が醜い異形に犯される姿。沙津樹は反抗することも忘れて、再び姉の媚態に魅入られた。

「姉に欲情して逸物をおっ勃るとは、とんだ変態娘よの。おお、硬い硬い」

男の性感の機微を隅々まで知り尽くした齡千歳を超える老人の指が、ねつとりと絡むように膨張した陰核——擬似男根と成り果てた巫女の性感帯に絡みつく。決して激しく擦らずにじわりじわりと欲情を積もらせる小さな性感の高まりに、唇が勝手に震えだす。

「ふわ、あううう……ッ！ 熱いいつ、おちんちん熱いよおお……ッ！」

りと足の爪先が地から離れる、不思議と安堵する浮遊感。老人の衣服から飛び出た鳶の群れが再び巻きつき、くすぐったくも小さな快感の授与と同時に沙津樹の小柄な肢体を持ち上げていく。戦巫女の清らかな装束が邪気を放つ異形の触手に覆われ、沙津樹の身体は姉の頭上——鬼の股間で猛々しく屹立する巨大肉勃起の真上へと運ばれる。

鬼に背を向けた形で降ろされていく妹の瞳は焦点がぼやけ、陶然と夢の世界を彷徨っていた。自失に近い状態でなおも姉をじつと見つめ続ける沙津樹の唇がわずかに動く。

「ま、まさか……やめてッ！ 沙津樹が壊れてしまうっ、あたしが、あたしが代わりになるからあッ！ 沙津樹には入らないわッ！ やめてええええええッ！」

事態を察した姉巫女の悲痛な叫びがこだまする。淫悦に喘ぐ妹は事態を飲み込めぬまま、硬く尖った腰回りほどもある肉の柱へと近づけられていく。ポニーテールを揺らし涙を零す姉に、朦朧とした意識の中で沙津樹は微笑んでみせた。朱袴から滴り落ちた甘い蜜液、沙津樹の愛液が真希の額をかすめる。

「姉さま……私、頑張ります……から。泣かないで……。いぎう……んっぐッッ!？」

——ずぬう……ッ！ ミチッ、ミチミチミチイッ！

悲壮の決意にも聞こえる言葉が姉の耳に届いた直後、沙津樹の腰は一気に真下へと落とされた。硬く勃起した鬼の生殖器は受け入れる巫女の身長を軽く凌駕し、凶悪にくびれた雁首で矮小な人間の牝を貫いていく。肉唇を割って突き入れられる牝の巨大さに小柄な牝壺が痙攣して初めて沙津樹の思考の霧は晴れ、途端に訪れた激痛に声を張り上げた。

——ぶづんッ！ ぶぢぢつ、ぶぢいッ！ ぬぶぶぶぶ……！

「んぎあああッッ！ はつ、ひいッ！ ひつ、ひぎいいいッッ！ 裂けるうつ、お股がああッ、壊れちやヴヴッ！ んひつ、あぐあ！ んんううう——ッ！」

自重で沈む小さな肉体が、許容量を大きく超えた規格外の凶器に軋み、悲鳴を上げる。比喻表現なしに、妹巫女自身、女性器が張り裂けた——そう体感していた。肉を裂かれるに等しい異物の強引な侵入に、毛穴から一斉に脂汗が吹き出し、串刺しにされたかの如き激痛が限界まで広がる淫裂から脳天までを突き抜ける。

「さつきいいいいいッ！ 離して、離せよつ、畜生オオオオオ——ッッ！」

「チッ、黙って見てろ牝豚ア！ いやいよ、俺たちの神の復活だ……！」

「胎から力を抜くのじゃ。沙津樹よ、お館様を受け入れよオ……！」

姉の絶叫、異形どもの暗い悦びで奇異に歪んだ声。三者三様の傍観者たちの声が闇を震わせる。蔦触手によつて鬼の剛直に押しつけられる肉体が引き千切られそうな痛苦に耐える中で、姉の声も異形どもの哄笑も、そのどれもが沙津樹の耳には届かなかつた。

「はぐつ、うあ、あッ！ 入つて……くるうううッ！ む、無理矢理イイイッ！」

優に沙津樹の胴回りほどもある肉幹が、ずぶ、ずぶとわずかずつであるが、蔦の力を借りて沈み込んでいく。大の字に固定されていた両腕は機敏に蠢く蔦によつて背中で纏めて縛り直され、両脚はめくれた袴の内で蒸れ上がる熱気に火照る淫肉がより見えるよう左右への開脚を強要されている。

ついでとばかりに白衣の内に潜った悪戯好きの鳶が乳首を締めつけ、ビクリと腰を震わせる小さな刺激が、妹巫女の意識をわずかに現実へ引き戻した。まだ完全には目覚めていないのか鬼は胡坐をかいて座したまま動かさず、自ずから腰を突き立てることはない。繋がり、牡によって裂かれた膣口から、真っ赤な血の筋が垂れているのが目に留まる。無残にも処女を散らされた、消し去りような確たる証拠だ。

「いやだ、よおつ、こんなやつてないっ……姉さまっ、助けて姉さまアアア！」

望まぬ形での破瓜。一時の悦楽に情けなくも流され、姉を危機に陥れ、宿敵である異形的首魁に処女を捧げてしまった。耐え難い現実の列拳に、沙津樹の精神は束の間幼女へと退行を起こしてしまっていた。無力にも清らかな声音で姉の助けを請う。けれど悲痛な瞳で見上げる姉巫女もまた、胎奥に深々と牡を啜え込まされた虜囚の身なのだ。子供の頃のような姉の助けはもう、ない。

「痛アツ、ああああああ……ッ！ お腹っほんとに裂けるヴヴうううッッ！」

深い絶望と苦痛を無理矢理に受け入れさせられる巫女が快楽を得られるはずもなく、ただ肉を裂かれる激痛だけが、沙津樹には与えられた。結合部からは処女の証たる破瓜血が滲み、ギチギチと押し広げられた肉唇に朱塗りの化粧を施していく。まざまざと見せつけられる肉体崩壊の危機に心が萎縮し、生物としての本能的恐怖が巫女の身を覆う。

——ドクン……ドクン……！！

「ンひっ……あひぁ……ッッ!?」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>